

Venir de infinitif 再考

佐 藤 正 明

0. はじめに

筆者は佐藤（2002）で *venir de infinitif* 全般の機能的な価値を明らかにするよう努めた。しかし、その後の考察を通じて、先の記述から漏れている幾つかの問題点がありそうなので、「原因とその現在の結果状態」を表す次の LEBAUD (1989, p. 137) の典型例とそのバリエーションを再考察してみたい¹⁾：

- (1) — Tu as écouté la radio ce matin ? (= tu sais la nouvelle?)
— Non, je *viens de me réveiller*.
— 今朝ラジオを聞いた。（＝ニュースを知ってる。）
— いや、目が覚めたところなんだ。

なお、この種の「因果関係」は (2) の例のような複合過去形、あるいは、(3) の現在形でも表すことができるので、それぞれが (1) と競合する側面を持っていると考えることができる：

- (2) Il *a plu*, la chaussée est mouillée. (FRANCKEL, 1989, p. 95)
雨が降ったんだ、道路が濡れているもの。
- (3) — Monsieur Dubois ?
— Vous ne l'avez pas rencontré dans l'escalier? Il *sort* à l'instant. (BRUNEAU et al., p. 339)
— デュボワさんは。
— 階段で会いませんでした。今出ていったところです。

したがって、これらの2つの動詞形態による競合形は、*venir de infinitif* の分析にとって比較の対象とする価値があり、また、それによって、相互に、考察の具体的な手掛かりを与えてくれる可能性がある。

また、*venir de infinitif* については相当数のモノグラフがあるものの²⁾、上記のような競合形、特に (3) のようないわゆる「過去に膨張した現在 *présent dilaté dans le passé*」との比較は手薄なようである。そこで筆者は *venir de infinitif* の考察を主な課題とし、因果関係を示す複合過去と現在との対比によって分析を補強することを最終的な目標としてみたい。ただし、競合形との比較は多大な紙幅を要するので、稿を改めて作業を進めることにする。

1. 因果関係の標示

以下の観察では佐藤 (2002) との重複を最小限に留め、先に手薄であったと判断した点を再検討してみる。また、引用例もできるだけ先との重複を避けることにする。

LEBAUD (1989, 1992) と FRANCKEL et LEBAUD (1990) の分析を参照するならば, venir de infinitif を使用する文脈・状況に関与するのは次のような要素である:

(4) — Tu me parais bien fatigué, tu as été malade [Q_i] ?

— Non, mais je *viens de courir* un marathon [P], alors c'est normal que je sois fatigué [Q_j]. (LEBAUD, 1992, p. 170)

cf. — ??Non, mais je *suis venu de courir* un marathon, ...

— ずいぶん疲れているみたいだけど、具合が悪かったの。

— いや、でもマラソンを走ったところなんだ。だから、疲れているのは当然だよ。

この例では、質問文の発話者は発話時 T_0 での相手の様子がおかしいと感じているものの、それと断定することができない。つまり、これはまだ特定されていない「偶発的な状態 état contingent」を語る要素であり、本稿ではこれを Q_i と標示しておく。これに対して、venir de infinitif による返答の発話者は、病気ではないが Q_i の印象を与える「原因 P」を述べ、 Q_i と重なる状態を確定された「必然の状態 état nécessaire」あるいは「性質付与された状態 état qualifié」に変化させている。本稿ではこれを Q_j と標記しておく。

また、この偶然から必然への移行は「ある出来事 [P] の時間内での出現 manifestation を出発点として打ち立てられ、この移行を発話者が続いて特定化する」(Ibid., p. 173) ことになる。したがって、P は期待・失望などの話し手の価値判断が込められた前提が構築されてはならず、無前提で初出の事態の出現である必要がある。

なお、venir de... による P に対応する時点 t_i は自立した価値を持たず、 T_0 での Q の原因を述べるものとして Q に連結したものである。つまり、P は全体としては一つの事態の一側面に過ぎない。だからこそ、広く確認されているように、この迂言形を自立した成就点・状態変化点をマークする複合過去形に置くことができない。

こうした関与的な変数が語彙的に出揃っている例をもう一つ観察しておく。次の (5) ではより簡潔な必要最小限の表現のみで文脈が構成されている:

(5) — Tu prendras bien quelque chose [Q_i] ?

— Non merci [Q_j], je *viens de boire* un café [P]. (LEBAUD, 1989, p. 125)

— 何か飲むでしょう ?

— いいです、どうも。コーヒーを飲んだところなんです。

ここでも質問文は、相手が飲み物が欲しい状態だろう (= Q_i) と考え、そのことを確認している。返答では、先程とは提示の順序が逆になっているものの、 Q_i に重なる確定された結果状態 Q_j を先行させ、その理由 P を後続させている。したがって、venir de infinitif はこうした変数の組み

合わせを備えた因果関係を標示することが典型としての用法であると考えておくことができる。

ただし、例えば次の (6) のように、特定された必然的な状態 Q_i は先行する未確定の偶発的な状態 Q_j および原因・理由 P との関係で含意され、語彙的に表明する必要がない場合がある：

- (6) — Pourquoi es-tu si pâle [Q_i] ?
 — Je viens de voir un accident horrible [$P \rightarrow Q_j$]. (LEBAUD, 1992, p. 171)
 — どうしてそんなに青い顔をしているの。
 — すさまじい事故を見たところなんだ。

この例 (6) では、様子がおかしいことの原因を尋ねる質問 Q_i に答えて、そうならざるを得ない理由 P を述べている。それによって、動揺した状態にあることが自明のこととして含意されている。

これに対して、類似した状況で次の (7) のように返事をするならば、 Q_j が語彙的に顕在するパターンとなる：

- (7) — Qu'est-ce que tu as [Q_i] ?
 — Je suis encore sous le choc [Q_j] : je viens d'assister à une scène horrible [P].
 (FRANCKEL et LEBAUD, pp. 161-162 ; cf. *Ibid.*, p. 176)
 — どうしたの。
 — まだ動揺しているんだ。ぞっとする場面に居合わせたところなんだ。

さらに、LEBAUD は特定化の対象である $Q_i - Q_j$ 特に Q_j がないように見える、一見典型から逸脱した印象を受けるケースに言及している。彼の分析によれば、次の 2 例では共通して 1) 発話状況との「関連付け contact」と、2) そこからの「取り外し décrochage」が同時に行われている：

- (8) Tiens, au fait, je viens de voir Delphine, elle m'a dit que ses cours lui plaisaient beaucoup. (LEBAUD, 1992, p. 174)
 おや、ところで、デルフィーヌに会ったところだけど、彼の授業は彼女にはずいぶん面白かったと言ったよ。
 (9) Alors, petit cachottier, je viens d'apprendre que tu te mariais ! (*Ibid.*)
 それならば、ちょっとした秘密主義者め、君が結婚しているのを教えてもらったところなんだ。

つまり、(8) の例では、共発話者による先行する発話 (= Q_i) に対して、この文の発話者はそれとの「関係付け」と同時にそこからの「取り外し」を行なっている。こうした二重の側面は、文全体の意味の他に、tiens / au fait がマークする。また、この「取り外し」によって (8) の場合は Q_i に変更が加えられた「新たなテーマ」を導入しており、それがデルフィーヌの発言内容 (que ...) になっている。本稿では、これを Q_i' と標記しておくことにする。ここでも「ところで、デルフィーヌに会ったところだけど」はこの Q_i' を特定すると考えることができ、それによって Q_i' は、この文の発話者にとっては、 Q_j へと変質している。なお、LEBAUD がこの Q_i' または Q_j の部分を「新たなテーマ」と呼ぶのは、この文に後続する、例えば何が彼の授業の面白さかという点に関するデルフィーヌの意見を伝える部分が新情報としてのコメントだからであろう。

引用例の (9) では *alors* が先行する相手の発言 Q_i との「関係付け」とそこからの「取り外し」のマーカであり、これとの関連で相手を *cachottier* と呼ぶこと Q_i' の正当化・確定 (= Q_j 化) を *je viens ...* 以下の P が行なっている。したがって、これらの場合も例外的な使い方ではないというのが *LEBAUD* の主張である。

また、小熊 (p. 174) も上記の 2 例を引用し、この場合の *venir de ...* も別の事態 Q に「補足」あるいは「説明」 P を与えるものと分析している。つまり、後続するデルフィーヌの判断内容 (= 8) や話し手の「秘密主義者というレッテル」あるいは判断 (= 9) の「説明」であるとしている。

以上のことから、*venir de infinitif* では「偶発的な状態 Q_i 」とこれが確定された「必然の状態、性質付与された状態 Q_j 」が関与的であり、これらを媒介する「原因 P 」を標示するのがこの動詞形態であると考えておくことにする。

2. Venir de + N

こうした *venir de infinitif* が表す関係は、*venir* 全般の用法の中では³⁾、次の (10) のような名詞 (Nom) が後続するタイプ (= *venir de + N*) にも見出すことができる。*FRANCKEL et LEBAUD* (p. 168) は次の場所移動を示す *venir* の例 (10) が *venir de infinitif* と「機能の仕方の点で同じ原則」に従うと明記している：

- (10) Tu as l'air contrarié, que se passe-t-il [Q_i] ? — Je *viens* tout droit *de* chez l'inspecteur [$P \rightarrow Q_j$].

気を悪くしているみたいだけど、どうしたの? — 捜査官のところからまっすぐ来たところなんだ。

つまり、この場合も質問の段階では、確定されていない「偶発的な」状態 Q_i が問題とされ、一連の応答の出発点になっている。これを受けた返答では、主語 *je* の「捜査官のところ」という「指示関係上の定位主体 *localisateur de référence*」への関係付け P によって、先の偶発的な状態が「必然的な」状態 Q_j に変化している。言い換えれば、「偶発的」であった *je* の現在の状態に「存在理由」を与え、これを「正当化」している。

また、具体例の (11) では前半部は「主語の偶発的な特性」の記述になっていると解釈することができる。後半部は主語 *il* に対する「質化された定位主体 *localisateur qualifié* としてのマルセイユの割り振り」であり、それによって前半部の内容が「必然」の状態に変化している。こうして、この 2 項目の双方の間に「因果関係」が出来上がっている点が *venir de infinitif* と共通している：

- (11) Il a l'accent, il *vient de* Marseille.

cf. Il a l'accent, il *est venu de* Marseille. (*FRANCKEL et LEBAUD*, p. 167)

彼には訛りがあって、マルセイユの出身なんだ。

cf. 彼には訛りがあるけど、マルセイユからやって来たんだ。

これに対して、cf. のように複合過去におかれた場合は、発話内容は「場所移動の価値に直接結び

ついたもの」となる。つまり「先行する時間的な定位の痕跡」が備わった文になる。

次の引用例の (12) は (11) と同じ類いの文であろう。ただし、LEBAUD はこれが不定詞を用いた (13) と「並行関係 parallélisme」があると明言しているので引用しておきたい。LEBAUD によれば双方が「因果関係 causalité」を表す例である：

- (12) (...quelqu'un manifeste de l'étonnement devant l'accent de Marie)

— Marie, elle vient du Sud-Ouest. (LEBAUD, 1992, pp. 168-169)

(誰かがマリの訛りに驚きを示す)

— マリはね、フランス南西部の出身なんだ。

- (13) Tu parles si je suis crevé, je viens de courir un marathon ! (Ibid.)

くたくたなのかって、もちろんさ。マラソンを走ったところなんだから。

さらに、名詞が後続する (14) の venir de + N も、筆者には不定詞の場合との関連性がありそうに感じられる：

- (14) La panne vient du carburateur. (FRANCKEL et LEBAUD, pp. 165-166)

故障はキャブレターから来ている / ...が原因だ。(→ これは故障らしい故障・故障の典型だ。)

このタイプの venir de ... では、まず主語が「出来事・事件を表す名詞 noms-événements」になっている。具体的には、この他に「現象 phénomène, 痛み・苦痛 douleur など」を挙げている。そして、de 以下の「キャブレター」が、不定詞の時と同じように「質的な状況 SITqIt・指示関係上の準拠基準 repère de référence」を与える要素になっている。それによって、概念的な典型に至るセンターリングの構図を感じ取ることができる意味内容になっている。

ここでも過去の t_i 点設定は行われておらず、もっぱら発話時 T_0 での故障の状態を語るものになっていることが venir de infinitif と共通している。だからこそ、このままでは (15) のように複合過去におくことができない：

- (15) *La panne est venu du carburateur. (Ibid.)

故障はキャブレターが原因だった。

- (16) Sur ce modèle, les pannes sont toujours venues du carburateur. (Ibid.)

この型式については、故障はいつもキャブレターが原因だった。

T_0 と t_i との分離を作り出し、複合過去を可能とするためには、(16) のような幾つかの要因を整えることが必要だとされる。つまり、イタリックの部分のマーカーを付け加えることで、事態の反復と期間設定の読みを作り出し、複合過去との関係で発話時以前の事態の終結点 t_i を設定することが必要なようである。

さらに、センターリングがあると解釈できる venir de + N の例で venir de infinitif と関係がありそうなのは次のタイプである：

- (17) La sagesse vient avec l'âge.

叡知は年齢とともに達成される / 到来するものだ。

- (18) La souplesse vient avec l'entraînement, (*Ibid.*, pp. 163-164)

柔軟性は練習で獲得されるものだ。

具体例の (17) に即して述べれば、抽象名詞によるコンパクトな性質の主語は、ある「特性、述語的な概念 / () être-sage/」を直接参照する。ここでは、この種の「名詞主語についての言及」から出発して、この「主語の概念の中心 = la vraie sagesse」に至るセンターリングを示すと解釈することができる。その意味で、先の (16) と併せて、このタイプも *venir de infinitif* の基本的な構図に関連したものを持っていると考えることができる。

この点については *venir* 全般の検討がさらに必要であろうが、現段階のまとまった考察としては LEBAUD (1989), FRANCKEL et LEBAUD があるので、これらを参照されたい。いずれにしろ、*venir* は偶発的なものから出発し必然的なものに至る、不可逆性をマークする点で基本的な構図は同一であるというのがこの二人の大きな仮説であり、主張点の一つである。

3. 因果関係と近接性

LEBAUD (1992) は、GOUGENHEIM などによる「近接性」の指摘、および、流布されている「近接過去」という命名よりはむしろ本稿 1. で見た「因果関係」に着目する論文である。また、FRANCKEL et LEBAUD でもそれが基本的な立場になっている。加えて、類似した考え方は、少数派とは言え DAMOURETTE et PICHON (pp. 124-125 et passim), FLYDAL (p. 103), IMBS (p. 82) が従来から表明してきた。

この点に関する LEBAUD (1992, p. 172) の指摘は次のようなものである：「過去の近接性は特定化の関係によって生じる。特定する事行は特定される項目に先行しており、この2項目の間にとどのような断絶も介在していない。近接性が生じるのはこの必然的な連結性による」としている。

また、IMBS が同様のことを「媒介項の不在」と規定したことに言及し、次のようにまとめている：

On explique simplement cette absence d'intermédiaire par le fait que le procès invoqué ait pour fonction de fonder le terme actuel : il doit y avoir continuité - causale ou temporelle. Selon le type d'énoncé ou de contexte, une de ces interprétations pourra prévaloir, sans pour autant éliminer complètement l'autre.

媒介項の不在は引き合いに出された事行が機能として眼前に展開する項目を基礎付ける（＝特定する）ものであることにより簡潔に・まとめた形で説明される。つまり、連続性がなければならず、この連続性は因果関係あるいは時間関係の双方であり得る。発話内容や文脈に応じて、これらの解釈の内の一方が優位に立つ可能性があるものの、だからといって他方を完全に排除することはない。

具体的には次の (19) は時間関係が優位におかれ、近接性が強く感じられる例だとしている。確かに、ここでは「すぐに tout de suite」があり、これが連結した2つの項目 P, Q の間の近接性をマークしている。それによって時間関係がひいでた印象を受けるのであろう。つまり、この例はア

アイロンをかけたところで熱が取れていないから (P), すぐに着用するとしわになる (Q) ことを語っている文である:

- (19) Ne mets pas ta jupe tout de suite [Q_{i-j}], je viens de la repasser [P] !

スカートをすぐにはかないで, アイロンをかけたところだから.

- (20) Tu parles si je suis crevé [Q_{i-j}] ! Je viens de faire 5 heures de cours [P] !

くたくたなのかって, もちろんさ. 5 時間の授業をしたところなんだから.

これに対して, (20) の方は因果関係の表現へ力点が置かれた例として挙げている. この場合は「5 時間」は原因としての活動 P の数量計測の表現であり, それが結果 Q をもたらすのに十分高い程度に達したことを述べている. つまり, ここでは原因 P と現在の結果 Q の間隔の計測は行なっていない. したがって, 近接性の読みは少なくとも明示された形では出ていない. 双方の間に何時間あるいは, 場合によっては, 何日もの経過時間があっても口にすることができる文だと考えることができる.

ただし, ここで LEBAUD が確認している内容は因果関係と近接性の単なる配分の問題ではない. 上記の引用した説明でも「引き合いに出された事行が機能として眼前に展開する項目を基礎付ける (≡ 特定する)」ことから生じる意味効果が近接性であり, 本稿 1. で見た venir de infinitif 固有の関与する要因とその組み合わせが必要不可欠だというのが彼の仮説であろう.

こうした LEBAUD の考え方に対して, その後発表された安生 (1999, pp. 94-96) は例えば「10 年前 il y a dix ans」のような「非近接性」の事態には, 因果関係があっても, venir de ... が使えないことから, 因果関係を第一義とする説明に疑義を唱えている. しかし, 私見では venir de ... が表す固有の因果関係は, 複合過去によるもの, 過去に膨張した現在によるものとは異なる特性を持ち, それがいずれかの選択を行う際の動機となっていると考える⁴⁾. この点は, これまでの本稿の記述の課題であり, 特に筆者が今後の検討課題として稿を改めて正面から取り扱ってみたい点である.

また, 生田 (2001, pp. 95-98) は, 報道記事をコーパスとした頻度調査と用例分析を通じて「正当化 [= 安定化・特定化] の効果が明白に認められるもの」に対して, 必ずしもそうではないものが相当数に上るとしている. その代表例が記事の冒頭に venir de ... があるタイプで, 一般にその後方にも「正当化の対象になるものが見当たらない」というのが生田の分析結果である⁵⁾. この点をどのように考えるかも, 因果関係重視の立場に立つならば, ぜひとも説明が必要な点であろう.

以下の 3 例は, 報道記事や項目の冒頭にある簡潔な意味内容の収集例である:

- (21) **Flash d'information**

Nous venons d'apprendre la disparition de Laure Réal. Elle aurait quitté précipitamment son domicile le week-end dernier. Elle se serait rendue directement à l'aéroport de Roissy où elle aurait pris un avion pour Montréal. [...] AKYÜZ, Anne et al. (2001), *Exercices de grammaire en contexte ; Niveau avancé*, Hachette, p. 80.

ニュース速報

我々はロール・レアルの失踪の知らせを受けたところだ。彼女は太急ぎで先週末に住まいを後にしたらしい。ロワッシー空港にまっすぐ赴き、そこでモントリオール行きの飛行機に乗ったようだ。 [...]

生田 (pp. 97-98) は、venir de ... が冒頭にあるタイプはこの新しい出来事が「現状に [...] 影響を及ぼしていること」をマークし、それによって「読者 / 聞き手の関心を引きつける」意味効果が生じるとし、正真正銘の報道記事を幾つも引用している。本稿でもこの点には賛同する。しかし、直前で触れた「正当化の対象」がないとする点には異論を唱えたい。

つまり、ニュースの原稿または速報記事を装ったこの教科書の例でも、報道であり、有名人を取り扱っているのだから、発信者は受け手の側にもそれ以前の報道などを通じて「そのようなことが起こりそうな問題含みの状況にある」などの予備知識 (connaissances préalables) があると判断していると考えることができる。これが Q_i にあたり、venir de ... による P はそれが失踪という形で突発的に出現し、特定されたことを語っている。それ以下の失踪に伴う状況の方は、未確認なので条件法による伝聞形式になっているものの、完了形になっている通り、現在の結果 Q_{i-j} に重なる内容になっている。ただし、調査・取材の途上であり文字通りに特定された Q_j には至っていない。

長くなるので省略したが、さらに後続する部分では、周囲の人達によれば、彼女のライバルがパリに戻ったことを知り、自分のキャリアにとって脅威だと感じていること。今は親密な男性（この人も有名人なのであろう）と一緒にいるらしいことを述べている。これも少なくとも部分的にこうした状況についての予備知識 Q_i がメッセージの受け手の側にあると判断しており、それが失踪 P という形で裏付けられたことを伝えているように見える。なお、この文章の末尾では「ごく近いうちにロールの消息を伝えることができるだろう」としており、今は速報であり Q_{i-j} は断定し切れないが、近々文字通りに安定化された現状 Q_j を示すことになるとしているのであろう。生田が指摘する「関心を引きつける」意味効果はこうした要素の存在とその組み合わせを通じて生じていると本稿では考えておきたい。いずれにしろ、こうした興味深い使い方に注目してくれたのは生田論文であり、感謝している。

以上のように見てくると、(21) のタイプは 1) 報道であり、2) 取り扱われているのが著名人の近況とそれにまつわる出来事の出現なので、venir de ... が冒頭にきても Q_i が想定できる。また、それ以降の記述が Q_i を敷衍する Q_{i-j} になっているので、さらに何が問題であるかが了解しやすい。その点がこのタイプの大きな特徴のようである。

ただし、この用法も、 Q_i が語意化されず含意されている点を除けば、通常の用法からかけ離れたものではないであろう。具体的には例えば次の (22) のような項目の冒頭にある例と関連づけることができる用法だと考える：

(22) 4.4. L'expression du passé (2) :

les relations entre les différents temps du passé

Nous *venons de passer* en revue les valeurs propres aux temps du passé mais il est difficile, voire impossible, de les considérer en dehors des relations qu'ils entretiennent les uns avec les autres. POISSON-QUINTON, S. et al. (2002), *Grammaire expliquée du français*, CLE international, p. 144.

4.4. 過去の表現 (2) :

過去のさまざまな時制の関係

我々は過去時制に固有の価値を検討したところだが、しかしながらこれらを相互に取り結んでいる関係の埒外で考察するのは難しい、さらには不可能でさえある。

この場合は、項目の見出しの直後で *venir de ...* を用いているものの、先行する項目 4.3. (pp. 138-143) で個別の過去時制の検討が行われており、明示された Q_i がある。この Q_i に対して、先に具体例の (8), (9) について紹介した LEBAUD の「関連付け *contact*」と「取り外し *décrochage*」が関与しているのがこのタイプではないだろうか。つまり、何ページにもわたって記述した個別の形態の分析に言及することで (P), Q_i との「関連付け」を行なっている。これと同時にそこからの「取り外し」によって、先の標示では Q_i' としたものが出来上がっている。この Q_i' が「しかしながら *mais*」以下で述べられている相互の関係を見る必要であり、これが項目 4.4. の新たな主張点になっていると考えることができる。

こうした構図は次の例でも見ることができる。ここでは先行する項目の 3. が連合照応 (*anaphore par association*) とそこでのマイクロコスモス・小宇宙 (*microcosme*) の存在を詳述している。例えば、「一軒の家を見に行った。その屋根はよい状態である [...]」*J'ai visité une maison ; le toit est en bon état [...]*. (BLANCHE-BENVENISTE et CHERVEL, p. 32) では、家が連想させる構成要素としての屋根が他の要素と対比され、全体としてマイクロコスモスが構成されている。こうした全体としての枠組みと対比された内的な要素による枠組みがある二重の限定は定冠詞に固有のものであり、*le* を使用する典型的なパターンの一つであるとしている：

(23) 4. L'allusion à la situation..

Arnolphe — Quelle nouvelle ?

Agnès — *Le petit chat* est mort.

La notion de microcosme que nous *venons de voir* pour l'anaphore au contexte, s'avère utilisable aussi pour les énoncés en situation. Dans la réplique d'Agnès, le sens de l'énoncé oblige à concevoir du particulier. L'article *le* oblige à le concevoir comme unique et s'opposant aux autres éléments d'un ensemble, de ce que nous avons appelé un microcosme. Faute d'un microcosme discursivement exprimé, on se réfère naturellement à un ensemble auquel appartiennent à la fois les interlocuteurs et le seul *petit chat* possible pour eux. (*Ibid.*, p. 33)

4. 発話状況の暗示

アルノルフ — どうしたの.

アニェス — 小貓が死んだの。

文脈に対する照応 [= 連合照応] について我々が見たところであるマイクロコスモスの概念は状況内での発話文についても有効であることが証明される。アニェスの返答の中では、発話文の意味が特定されたものを思い浮かべるよう強いている。冠詞 *le* は文意が唯一のものであり、ある全体の、我々がマイクロコスモスと呼んでいるもの [= 発話状況] の他の要素に対比されたものとして思い浮かべるよう強いている。言説として言い表されたマイクロコスモスがないので、当然、対話者と同時に彼らにとって可能性のある唯一の小貓が属しているある全体 [= 発話状況] を参照しているのだ。

上記の (23) では対話の後ではあるが、説明文の冒頭で *venir de ...* が使われている。前項 3. の内容がこの項目 4. ではまだ安定化されていない Q_i であり、それとの「関連付け」と同時に「取り外し」による項目 4. での新たな主張点 Q_i' の導入がある。それが *venir de ...* の直後の後続部分であり、連合照応と同様にマイクロコスモスが有効だが、発話状況の暗示ではその構成方法が先とは異なることを語っているのであろう。

さらに、この (23) の場合は「言説として言い表されたマイクロコスモスがないので」以下では *venir de ...* が標示する安定化された状態 Q_j に相当する内容になっており、これが語彙的に表現されている。

以上の因果関係と近接性についての考察を基に、一見したところでは、時間関係に純化された印象を受ける使い方でも一般に *venir de infinitif* に固有の因果関係を標示する機能は消失していないのではないかという仮説を立てておきたい。

4. 結び

本稿では佐藤 (2002) で手薄になっていたのではないかと思う点を再検討してきた。まださまざまなタイプを網羅的に検討したわけではないものの、現段階での筆者の観察結果は次のようなことである。

venir de infinitif は 1) 「偶発的な状態 Q_i 」をこれが確定された「必然の状態 Q_j 」に変化させており、これらを媒介する「原因 P 」を標示する。また、2) ここでは P に対応する t_i 点は自立性がなく、 T_0 と連結・直結されており、 P は全体として一個の現在の状態 Q を語る一側面になっている。

なお、2) で述べた点は「因果関係の複合過去 *passé composé inférentiel* (= 2)」との大きな相違点であり、こちらは原因・結果の双方が自立性を持った 2 項目になっているはずである。*venir de infinitif* が標示する因果関係に複合過去以上に類似した構図を作り出すのは「過去に膨張した現在 (= 3)」の方であろうというのが筆者の予測である。しかし、これら 2 つの競合形との比較は稿を改めて詳細に行なってみたい。それによって *venir de ...* に関する仮説の是非がさらに明らかになってくるものと考えている。

[注]

- 1) 本稿は2002年12月21日慶応大学三田で行われたフランス語学会有志による「フランス語学と一緒に勉強する会」で話をさせてもらった内容の一部に手を加えたものである。3時間に及ぶ議論の中で、貴重なご教示をいただいた参加者および世話人の方々に心からお礼を申し上げたい。競合形との比較に進んでゆく前に venir de infinitif そのものをもう一度観察し直す気になれたのもそこでのご指摘と議論のおかげである。

なお、本稿での venir de infinitif とする表記法は LEBAUD (1992) にならった。標識・マーカ―としての venir de に対して、統語上の機能を示す「不定詞 infinitif」は異質のものであり、引用語のように考え de の母音字省略 (élision) をしていないのであろう。このテーマに関する LEBAUD の功績を尊重し、彼の表記に従うことにする。

- 2) これについては佐藤 (2002), p. 44 と注の 3) で筆者が知る限りのものを列挙している。その時点で筆者が見落としていたものとしては安生 (1999) がある。また、最近、生田 (2004) が刊行されている。
- 3) LEBAUD (1989) および FRANCKEL et LEBAUD は venir 全般の定義と個別の用法の記述がテーマである。この点は本稿の課題を大きく超えるものであり、venir de infinitif そのもの、および、これと直接関連する用法に限って参照することにする。
- 4) 安生に批判的な意見を述べたが、本稿で問題としたいのはこの一点のみである。過去の事態の時間位置による「無条件的近接性、(実時間としては発話時との間隔がある) 条件的近接性、非近接性」に対応する因果関係の分析と具体例の検討には多くの示唆を得た。記してお礼申し上げます。

また、慶応大学で話をさせてもらった折、安生 (p. 99) のように近接性が第一義で「因果関係はその結果にすぎない」という考え方に近いのではないかと思うが、Celui-là qui vient de passer, s'appelle X (あの人が、今通っていったばかりの人が X だよ) のような使い方ができるのだから、時間的な近接性を重視する必要があるとのご指摘があった。強弁すれば、前後関係や話し手がこれによって主張したいことを付帯させると因果関係を見ることができるかもしれないが、速断はできないので、今後も観察を続けるということにしておきたい。

- 5) 生田の考え方は LEBAUD の仮説だけではうまくいかないということのようである。すなわち、「LEBAUD の説を踏まえつつ、FLYDAL の定義に立ち戻って」と断り書きし (p. 96)、正当化 / 特定化の他に「関心を引く」用法と「想起を促す」用法を認めるべきであるとしている。

[参考文献]

- BRUNEAU, Ch. et al. (1974), *Grammaire française*, Paris, Delagrave.
- DAMOURETTE, J. et E. PICHON (1911-1936), *Des mots à la pensée*, t. V, Paris, d'Artrey.
- FLYDAL, L. (1943), '*Aller*' et '*venir de*' comme expressions de rapports temporels, Oslo, Dybwad.
- FRANCKEL, J.-J. (1989), "Le Passé composé", in J.-J. FRANCKEL, *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Genève / Paris, Droz, pp. 91-111.
- FRANCKEL, J.-J. et D. LEBAUD (1990), "Venir", in J.-J. FRANCKEL et D. LEBAUD, *Les figures du sujet. A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Paris, Ophrys, pp. 161-177.
- GOUGENHEIM, G. (1971 ; 1^{re}éd., Les Belles Lettres, 1929), *Etude sur les périphrases verbales de la langue française*, Paris, Nizet.
- IMBS, P. (1960), *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Paris, Klincksieck.
- LEBAUD, D. (1989), "VENI, VIDI... VICI? : Eléments d'analyse en vue d'une caractérisation générale du marqueur VENIR", in *La notion de prédicat*, coll. ERA 642 (URA 1028), programme «invariants langagiers», Université de Paris 7, pp. 117-139.
- (1992), "Venir de infinitif : localisation d'un procès dans un passé récent ou spécification d'un état actuel?", in *Le Gré des Langues* 4, pp. 162-175.
- 安生恭子 (1999), 「Venir de + infinitif について」, 『Etudes françaises』32号, 大阪外国語大学, pp. 83-103.
- 生田夏樹 (2001), 「迂説形 venir de + infinitif の意味効果について」, 『ヨーロッパ言語文化研究』第20号, 岡山大学文学部, pp. 91-107.
- (2004), 「Venir de infinitif と基準点の問題について」, 『フランス語学研究』第38号, 日本フランス語学会, pp. 46-50.
- 小熊和郎 (1994), 「トコロダと aller, venir de, être en train de + infinitif — アスペクトとモグリティーの関連を巡って —」, 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』第29巻, 西南学院大学学術研究所, pp. 139-175.
- 佐藤正明 (2002), 「Venir de infinitif の機能的価値」, 『福岡大学研究部論集』第2巻A第4号, 福岡大学, pp. 43-58.